

氏名	武笠 由以子
ヨミガナ	ムカサ ユイコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第490号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 1940年代における抽象表現主義作家たちの初期作品—シュルレアリスム受容から新しいアメリカ美術の確立へ—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	国立新美術館	副館長		南 雄介

（論文内容の要旨）

1940年代前半、アメリカの若手画家たちはヨーロッパのモダン・アートを学びつつ、同時代の社会を反映する新しいアメリカ美術を探求していた。本論では、抽象表現主義作家たちの初期作品を分析し、彼らがシュルレアリスムから学んだオートマティスムと神話という主題を独自の方法で応用することで、新しい美術の創造という社会的要請に応え、アメリカを代表する芸術家と認識されるに至ったことを論じる。

第1章では、1940年代における抽象表現主義の活動を概観し、シュルレアリスムとの関係についての先行研究を確認した上で問題提起を行う。

第2章では、シュルレアリスムの画家たちと版画家スタンリー・ウィリアム・ヘイターの版画作品において、オートマティスムが如何に応用されたのかを考察する。1930年代のパリと1940年代のニューヨークでヘイターが主宰した版画工房アトリエ17では、コラージュやオートマティック・ドローイングなどシュルレアリスム絵画の技法を応用した版画が制作された。それらの分析を踏まえて、ヘイターの試みに感化されたジャクソン・ポロックらアメリカの作家たちが、オートマティスムを応用して独自の版画・絵画制作を展開したことを論じる。

第3章ではシュルレアリスムからの神話主題の継承に注目し、抽象表現主義の代表的画家マーク・ロスコが1944年に描いた盲目の予言者テイレシアスの肖像画を取り上げ、黒い隻眼によって表される盲目性と予言というモチーフについて考察する。シュルレアリスムにとって重要な主題である内的視覚が、ジョルジョ・デ・キリコやマックス・エルンストらによる目のモチーフを扱った絵画作品の中でどのように扱われたのかを確認し、《テイレシアス》の場合と比較する。更にロスコによる声明の中で言及される芸術家像を分析することによって、《テイレシアス》は芸術家だけが有する特殊な視覚を隻眼によって表しており、真実を見るための内的視覚をもつ芸術家の表象であることを結論づける。

第4章では、同じく抽象表現主義画家のアドルフ・ゴットリーブによる1940年代から50年代初めの初期作品群ピクトグラフを取り上げ、そこに描かれた「目」と「英雄」のモチーフの意味内容を、ゴットリーブと美術批評家たちとのメディア上の論戦と照らし合わせて考察する。批評家からの非難に対して反論するゴットリーブの声明には、保守的風潮の中で無理解に晒される英雄的芸術家としての自負が窺え、この芸術家としての自意識が、「目」と「英雄」のモチーフを自己表象と結びつける形で展開させた。1950年の作品では「目」のモチーフは予言者テイレシアスと英雄テセウスとの連想を示すようになる。ゴットリーブはこの二人の神話上の人物に新しい芸術を探求する芸術家の姿を投影し、この予言者かつ英雄としての芸術家像を自己表象として作品に組み入れたのである。

第5章ではシアトルを中心に活動した画家マーク・トビーを取り上げ、1940年代の作品をシュルレアリスム

と東洋美術の影響という観点から論じる。トビーは東洋の美術や哲学に強い関心を抱き、伝統的な西洋絵画を東洋美術の線描表現と融合させることで新しい絵画を創造しようと試みた。同時に彼は、抽象表現主義作家たちと同様にシュルレアリスムを学び、一見明らかではないものの、その成果を作品に反映させている。1940年代におけるトビー作品の展開は、オートマティック・ドローイング、そして内的視覚と精神的な光という主題をシュルレアリスムから受容し、独自のオールオーバーな線描表現を特徴とする抽象画を確立する過程を示しているのである。

第6章では、1940年代後半以降、冷戦期の政情を背景として、モダン・アートと新しいアメリカ美術についての議論が抽象表現主義の成立にどのように関わっていたのかを分析する。特に、抽象表現主義の代表的画家として賞賛されたポロックと、一地方画家として軽視されたトビーに注目し、両者への批評を比較することで、彼らに対する評価の確立する経緯を考察する。更に抽象表現主義作家たちが、批評家たちの言説にどのような反応を示したのかを検討し、作家と批評家との関係が抽象表現主義という戦後アメリカを象徴する芸術動向の形成を導いたことを論じる。

抽象表現主義作家たちは1940年代前半、ヨーロッパのモダン・アートを学びつつ、新しい絵画様式を模索しており、戦後に彼らが独自の絵画様式を確立する過程には、シュルレアリスムの受容と並んで、批評家との関係が大きく関わっていた。それら複数の要素が抽象表現主義という美術動向の形成を促し、ヨーロッパ美術の伝統を受け継ぎながらもアメリカ的アイデンティティを体現する芸術としての同動向の評価を導いたのである。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、第二次大戦後に抽象表現主義の画家として活躍するアーティストたちを対象に、シュルレアリスムの影響の色濃い1940年代の作品を分析し、シュルレアリスムの着想がどのように彼らの制作に活かされ、さらに、いかなる変容の過程を経て最終的に「抽象表現主義」の名称でくられる戦後のアメリカ絵画として成立していったのかを考察した論文である。主な対象作家は、スタンリー・ウィリアム・ヘイター、マーク・ロスコ、アドルフ・ゴットリーブ、マーク・トビーであり、関連してジャクソン・ポロックについても論じられる。絵画作品の分析のみならず、彼らに向けられた同時代の批評を丹念に考察し、制作者と批評家との応答関係に注目しつつ、作品スタイルの変容過程を解釈している点に本論文の大きな特徴がある。

1930年代にヨーロッパのファシズム政権を避けて多くの先進的芸術家がアメリカに亡命し、なかでもシュルレアリスムの作家たちが当時の若いアメリカ芸術家たちに大きな影響力を及ぼしたことは、つとに知られている。本論文では、シュルレアリスムがもたらしたオートマティズムの手法と神話主題への関心を主要なファクターとして取り上げ、1940年代の画家たちの制作のなかにその変容過程を跡付けた。大きく言えば、シュルレアリスムに由来する実験的な制作手法と特定の主題への関心が、アメリカの若手作家たちをとりまくアクチュアルな状況のなかで特徴的な取捨選択を経て、独自の表現スタイルとして発展・定着していくプロセスが問題とされる。

論文では第一章でシュルレアリスムのアメリカへの移入の概略説明と問題提起が記されたのち、第二章でヘイターが主宰した版画工房アトリエ17での活動について論じられる。ここでは、シュルレアリスムのオートマティック・ドローイングの手法が注目され、移住してきたシュルレアリスム作家たちと、のちに抽象表現主義を代表する画家たちがしばしば制作を行なったが、その環境のなかで、やがて「オールオーバー」の成立につながっていく手法が特徴的な表現スタイルとして成立していく過程が論じられている。

第三章ではシュルレアリスムの特権的テーマである「オイディプス神話」が取りあげられ、この神話に登場する盲目の予言者テイレスシアスが、1940年代前半のロスコの作品のなかで奇妙な隻眼の人物像として表わされている点に注目する。この隻眼のモチーフは、神話の内容に応じて、すでにシュルレアリスム作家たちによって「内的視覚」を暗示する象徴的モチーフとして描かれていたものだが、ロスコにおいては、このモチーフが自画像的ニュアンスを強く伴って用いられていることが論じられる。

続く第四章では、ゴットリーブの「ピクトグラフ」と呼ばれる初期作品群、すなわち画面を格子状に分割してそれぞれの区画に謎めいたシンボルを配した一連の作品が論じられる。ここでは丁寧なモチーフ分析

を通じて、前章のロスコ作品の分析と共通する隻眼のモチーフに加えて、神話の英雄テセウスによる迷宮の探検が特権的モチーフとして現れていることに注目する。筆者はこの英雄のモチーフを、周囲の無理解と嘲笑のなかで毅然として独自の表現を探求していく「英雄的芸術家」のメタファーとしてとらえ、その論拠として、同時代の批評家たちによる嘲笑的な批判と、そうした批判に対するゴットリーブらによる応答を丹念に跡付けている。

第五章では、ニューヨークに本拠を置く画家たちとはややスタンスを異にする西海岸の画家トビーを取りあげ、東洋美術とシュルレアリスムの双方から示唆を受けて描かれた彼の先駆的なオールオーバー作品を紹介している。この章と緊密に連続するかたちで、続く第六章では、オールオーバーを共通項とするトビーとポロックに対して、ある時期から批評家クレメント・グリーンバーグが示した対照的な評価が分析対象となっている。いうまでもなくグリーンバーグは、大戦後に「抽象表現主義」というアメリカ独自のアヴァンギャルド芸術が高い評価を獲得する上で大きな影響力を発揮した批評家であるが、1940年代後半から、ポロックの作品を力強さとスケールというアメリカ的特質の体現として称揚するなかで、トビーの繊細なスタイルを対比的に批判する態度に転じている。筆者はこの現象を、オートマティック・ドローイングを共通基盤として成立してきた二人の画家のオールオーバー的手法を、「アメリカ的特質」というバイアスのもとで選り分ける態度として解釈し、やがて抽象表現主義と称されることになる一定の様式的方向性を成立させるためのモーメントととらえている。

以上のように本論文は、アメリカにおける抽象表現主義の成立過程を包括的に論じたものではなく、シュルレアリスムの受容とその変容、およびその過程で働いた「アメリカ独自のモダン・アート」の希求という要因を軸として、ひとつの歴史的解釈を提示したものである。アメリカで戦前の一時期にシュルレアリスムの強い影響があったことはすでに常識に属する一方、本論文の特徴と独創性は、その「影響」の内実により深く目を向け、シュルレアリスムに由来する造形的要素が選択的に変容をとげ、アメリカ独自の状況のなかでのちの抽象表現主義に集約されていくプロセスをたどろうとした点にあるといえる。当然ながら、論述の不十分な点もないわけではなく、たとえば分析対象とする時代が第二次大戦と重なっているにもかかわらず、大戦のインパクトに関する考察（たとえばロスコやゴットリーブのようなユダヤ系芸術家のケース）はほとんど行なわれていない。とはいえこうした側面は、問題の性質上、作品の造形との関連を実証的に論じる上で依拠し得る具体的な証言や史料に乏しいことを考えれば、今後の課題とすることもいたし方ないであろう。全体として本論文の議論のトピックは選択的であるが、その論旨は緻密な作品観察と同時代史料の丁寧な読み取りに裏付けられており、抽象表現主義の成立前史に対する有効な貢献として十分な評価に値する。